

音や音楽のよさや美しさを聴き取ろう 感じ取ろう そして伝え合おう  
～音楽的な見方・考え方を働かせ、進んで音楽に親しみ、  
音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するための授業づくり～

研究副主題 「一人ひとりの可能性を引き出し、音楽表現を高めるための資質・能力を育成する  
授業づくり ～自ら学び方を選択する個別最適な学びを通して～」

### 1 研究副主題設定の理由

急激に変化する時代の中で、豊かな人生を切り拓き持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成するために、「令和の日本型教育の構築」がある。四街道市においても、児童生徒が抱える困難が多様化・複雑化する中で、児童生徒の発達や学習を取り巻く個別の教育的ニーズを把握し、様々な課題を乗り越え、一人ひとりの可能性を伸ばしていくことが課題となっている。一方、音楽科では、音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽と豊かに関わる資質・能力を育成するための授業づくりが求められている。そこで、本研究においては、器楽表現における個別最適な学びを通して、児童生徒の可能性を引き出すような授業を展開し、思いや意図を表現に生かすために必要な、資質・能力を育成したいと考え、本副主題を設定した。

### 2 研究仮説

多様化する児童一人ひとりに対応する学習環境を整備し、自らに合った学び方を選択できるようにしていけば、主体的に学習に取り組み、音楽表現を高めるための資質・能力を伸張することができるであろう。

### 3 研究内容

- (1) 基礎的理論研究
- (2) 市内小中学校の実践
- (3) 研究の手立て
- (4) 検証するための授業実践

### 4 結論

- ・多様化する児童一人ひとりに対応する学習環境を整備し、自らに合った学び方を選択できるようにしたことで、主体的に学習に取り組み、音楽表現を高めるための資質・能力を伸張することができた。
- ・児童の実態は、さらに多様化していくことが予想される。本研究において、成果を実感できていない児童もおり、すべての児童にとって十分な支援ができていたとは言えない。どのような児童に対しても、個別最適な学びとなるような授業づくりについてさらに検証していく必要がある。

第五部会

四街道市立中央小学校 石田 宏江  
四街道市立四和小学校 相葉 昌枝  
四街道市立みそら小学校 佐藤 智子

## 1 研究主題

音や音楽のよさや美しさを聴き取ろう 感じ取ろう そして伝え合おう  
～音楽的な見方・考え方を働かせ、進んで音楽に親しみ、  
音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するための授業づくり～

2 研究副主題 「一人ひとりの可能性を引き出し、音楽表現を高めるための資質・能力を育成する授業づくり ～自ら学び方を選択する個別最適な学びを通して～」

## 3 研究副主題設定の理由

### (1) 学習指導要領との関わり

『小学校学習指導要領解説 音楽編』 第3章 第3学年及び第4学年の目標と内容

#### 第2節 A 表現(2)器楽

ア 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつこと。

『小学校学習指導要領解説 総則編』 第3章 第4節の1 児童の発達を支える支援の充実

(4)児童が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、(中略)指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。

### (2) 国や市の教育施策の動向から

【令和の日本型教育の構築を目指して 令和3年1月中央教育審議会答申】より

急激に変化する時代の中で、豊かな人生を切り拓き持続可能な社会の創り手となることができるような、資質・能力の育成

全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現

【第2期 四街道市教育振興基本計画 令和6年3月 四街道市教育委員会】より

学び つながり 輝きあい とともに未来を拓く人づくり

(施策1より)

変化し続ける社会を主体的かつ協働的に生きるために必要な資質能力を育む教育

ICTを有効に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善に取り組む。

(施策10より)

個の可能性を広げる学びの充実

少人数教育や日本語指導、特別支援教育等、教育的ニーズに応じた支援を行い、子どもが自分らしく輝くための学びを推進する。

これらの国や市の教育施策の動向から、音楽科指導においても、誰にとっても分かりやすく理解しやすい授業を展開することで、一人も取り残さない教育を目指すことが重要であると考えられる。そのために、音楽における資質・能力の段階的な育成や、児童が自ら学び方を選択できるような学習環境を整えることを通して、個別最適な学びを実現させたい。

### (3) 児童の実態から

四街道市は、千葉県の北部に位置し、都心へのアクセスも良いことから首都圏のベッドタウンとして発展してきた。医療費助成や小中一貫教育の推進など、子育て支援に力を入れており、都心に近い立地でありながら、蛸が住む里山など緑豊かな自然にも恵まれているためか、移住者も多く人口は増加している。

市内には、小学校12校・中学校5校がある。地域によって増減はあるが、総じて児童生徒数は増加傾向にある。児童生徒の多様化の一つとして、国外からの移住者が増えており、市内全児童生徒の内、4%にあたる約330人が外国籍の児童である。移住元はアフガニスタンや中国、モンゴル等多岐に渡り、文化や教育環境の違いから、長期に渡って個別の指導が必要である。四街道市教育振興基本計画（令和6年）の調査によると、市内の教職員が「個に応じた指導」や「障害のある児童支援」の施策に強く関心をもっていることから、外国籍以外にも個別の指導や支援を必要としている児童生徒の実態を読み取ることができる。（資料1）

中央小学校は、各学年3学級または4学級、特別支援学級6（知的3、情緒3）学級、全校児童676名の学校である。「あいさつ、歌声、黙働清掃」に力を入れており、児童は明るく活発である。校内で、通常学級担任にアンケート調査を行ったところ、日本語での指導が難しい外国籍児童や、学習面・情緒面で個別の対応を必要とする児童数が、通常級1学級につき平均7人、全体の約2割に該当するという調査結果であった。これは、文部科学省による「通常級の内の支援を要する調査（令和4年）」における、1学級平均2～3人という結果を大きく上回る。さらに、特別支援学級から、交流学习として授業に参加している児童も数名おり、様々な個性をもった児童が多く、その教育的ニーズも多様化している実態がある。多様な個性あふれる集団の中で児童は、国籍や文化が違っても身振り手振り等で意思疎通を図ったり、学び合いを通して互いに助け合ったりする姿が日常にあり、多様性に関して極めて寛容でのびのびと生活している。

本研究の対象となっている第4学年は、今年度から専科が授業を担当している。歌声の質が高く、音や音楽を大切に表現しようとする児童が多い一方で、音楽の知識やリコーダーの演奏技能では個人差が大きい。実態調査では、リコーダーを演奏することが「好き」と答えた児童が85%であったのに対し、「得意」と答えた児童は70%に留まり、「好きではない」と答えた児童のほとんどが、「得意ではない」とも回答している。「得意ではない」と答えた理由には、楽譜を読むことや正しい指づかいで演奏すること、息の調整が難しいなどの回答があった。演奏の様子からも、技能に自信がない児童は、途中で諦めて演奏をやめてしまうなど、表現することの喜びや楽しさを味わいにくくなっているように見える。（資料2）

以上の実態から、本研究では表現領域の中でも器楽分野に絞って検証を行う。研究を通して育成される資質・能力が、他の分野・領域においても児童の後の学びに生かされるようにしたい。

## 4 研究仮説

多様化する児童一人ひとりに対応する学習環境を整備し、自らに合った学び方を選択できるようにしていけば、主体的に学習に取り組み、音楽表現を高めるための資質・能力を伸張することができるであろう。

## 5 研究の実際

### (1) 基礎的理論研究

#### ア「学び方の選択」について

『学習指導要領解説 総則編』「第4節の1 児童の発達を支える支援の充実」の中では、児童生徒が基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図ることについて示されている。「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した概念が「個別最適な学び」であり、具体的に「指導の個別化」と「学習の個性化」の概念に分けられてきた。これについて、奈須（2022）は、「一人一人に合った学習時間や教材、指導方法を柔軟に、あるいは多様に準備して、子供が自分に合った方法で勉強できること。それによって、すべての子供に学習の成立を保障することができる。（後略）」と述べている。これを受け本研究における「学びの選択」の視点としては、「個々の学習ニーズに対応した教材や複数用意された学習方法から、児童が自分に合うと判断したものを選び、活用すること」となる。

#### イ「学習環境」について

「令和の日本型教育の構築を目指して」（令和3年1月中教審答申）では、「個別最適な学び」のうち「学習の個性化」について、「教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適になるよう調整すること」としている。これを受けて本研究では、児童一人ひとりに対応する「学習環境」について、児童が自分に合った方法を選択できる（すべての児童の学びを保障する）ような、多様な学び方が用意された状態のことと定義する。

#### ウ「音楽表現を高めるための資質・能力」について

『小学校学習指導要領解説 音楽編』では、器楽分野における「思考力、判断力、表現力等」に関する資質・能力について、

#### 第3章・第2節 2内容-A表現(2)

ア 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつこと。

としている。指導に当たっては、「曲の特徴についての気づきを深めたり、必要な技能を身に付けたりしながら、表現方法などを様々に試すなどして、器楽表現を工夫する楽しさを味わい、思いや意図を膨らませるようにすることが大切」とある。これを受け本研究では、「音楽表現を高めるための資質・能力」を「児童が思いや意図を表現に生かすために必要な知識・技能」と考え、まず、器楽表現における知識・技能について、「読譜」「拍やリズム」「リコーダー演奏」の技能の定着や向上を図る。段階的、継続的に小さな成功体験を積み上げることで、演奏に自信をもち、表現することの喜びや楽しさを味わうことができるようにしたい。

### (2) 市内小・中学校の実践

本研究を進めるにあたり、個に応じた授業実践の情報交換の場として、市内小中学校の音楽科担当教員で研修を行った。（資料3）

視覚的にわかりやすい教材や、常時活動の工夫が多く見られ、そこで得られた情報を参考にしながら、研究の手立てを以下のように設定した。

(3) 研究の手立て

手立てⅠ 段階的・継続的に学びを積み重ねる常時活動を取り入れることで、児童が無理なく音符の知識や拍感、リズム感を身に付けられるようにする。

- ①「階名フラッシュ」…8ビートに乗せてモニターに映る音符の階名を読む活動
- ②「ボルカ・ワルツ体操」…2拍子や3拍子の音楽に合わせて身体を動かす活動
- ③「リズムフラッシュ」…モニターに映るリズムを読み取り、リズム打ちをする活動

手立てⅡ 学習素材や表現の仕方について、児童が自分に合った学び方を選択できるような環境を整えることで、主体的に学習に取り組めるようにする。

- ④ 視覚的に分かりやすい学習素材の用意
- ⑤ 旋律の特徴に合った演奏表現について、意見を共有する場の設定

(4) 研究の実践


対象 四街道市立中央小学校 第4学年

題材名 「はくとせんりつ」

教材名 「ラバースコンチェルト」「メヌエット」「トルコ行進曲」「エーデルワイス」

ア 指導の概要(7時間)



時	◎学習目標 ○学習活動	手立て
1	◎曲を聴いて、2拍子・3拍子・4拍子の違いを感じ取る。 ○常時活動(①階名フラッシュ・②ボルカ体操) ○音楽に合わせて指揮をしたり、歩いたりして拍の違いを感じ取る。	①階名読みのためのフラッシュカード
2	◎拍子の仕組みを理解する。 ○常時活動(①階名フラッシュ・②ボルカ体操) ○4分の2拍子・4分の3拍子・4分の4拍子について、「4分音符を1拍とした○拍子」であることを、ワークシートに4分音符を書き込むことで理解する。	②音楽に合わせて身体を動かし、拍感をつかむ活動
3	◎「エーデルワイス」の主旋律を演奏する。	④数字楽譜 ④手本動画
4	○常時活動(①階名フラッシュ・②ワルツ体操) ○指揮をしながら聴き、3拍子の拍感や曲想をつかむ。 ○楽譜に階名を書き込んだり、階名唱をしたりして、旋律の特徴をつかむ。 ○自分に合った学び方を選択し(④)、リコーダーで主旋律を演奏する。	
5	◎「エーデルワイス」を2つのパートに分かれて演奏する。 ○常時活動(③リズムフラッシュ・②ワルツ体操) ○副旋律の特徴を、リコーダーで演奏する。(④) ○2つの旋律の重なりを聴き合って演奏する。	③リズム打ちのためのフラッシュカード

6 7	<p>◎「エーデルワイス」の3段目の演奏の仕方を話し合い、音楽的な表現を高める。</p> <p>○常時活動 (③リズムフラッシュ)</p> <p>○1・2・4段目の旋律の特徴をボールや手の動きで表すことで、視覚的に捉え理解する。</p> <p>○3段目の旋律の特徴を、他の旋律と比較することで理解する。</p> <p>○3段目の旋律をどのように表現するかについて、自分の考えをオクリンクのカードにまとめ提出する。(⑤)</p> <p>○演奏の工夫をグループで話し合い、思いや意図を表現に生かして演奏する。(⑤)</p>	 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>⑤オクリンクの活用 グループ活動</p> </div>
--------	---	--

#### イ 検証授業の実際と考察

手立てⅠ 段階的・継続的に学びを積み重ねる常時活動を取り入れることで、児童が無理なく音符の知識や拍感、リズム感を身に付けられるようにする。

#### ①「階名フラッシュ」

(活動内容)	
<p>○8ビートに乗せて、モニターに映った階名を正しく読み答える。</p> <p>・単音(1点ハ～2点ニ)</p> <p>Step1…全員で答える</p> <p>Step2…列ごとに答える</p> <p>Step3…一人ずつ答える</p>	<p>・2音(2度音程)</p> <p>Step1…音符を見て答える</p> <p>Step2…聴き取りチャレンジ</p>
	
(児童の様子)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽譜の「みそしる」(資料4)を頼りに、どの児童もゲーム感覚で意欲的に取り組むことができた。</li> <li>・読みやすい音(ド、ミ、ソ、シ)は自信をもって答えることができた。それ以外の音は、答えるまでに時間がかかったが、少しずつ早く読めるようになった。</li> <li>・読譜が得意な児童は、「聴き取りチャレンジ」のコースを進んで選択した。</li> <li>・各学級2～3名は、繰り返し行ってもスムーズに読むことができない様子があり、ペアやグループで教え合った。</li> <li>・常時活動に取り入れてしばらくすると、歌唱教材や器楽教材においても、旋律の特徴をつかむ場面で「高いレから始まるから…」など、階名や音高を糸口とする意見が増えた。</li> </ul>	

#### (考察)

- ・事後調査の結果、階名を正しく答えられた児童は8割を超え、ほぼ全員が「以前より楽譜が読みやすくなった」と答えた。実際に視奏をしてみると、階名を書かない楽譜で正しく演奏できた児童数が、事前調査の約3倍となった。(資料8-4・8-5)このことから、個々の能力に応じたスモールステップの読譜学習を取り入れることで、児童の実感を伴いながら読譜の能力を高めることができたのではないかと考察する。
- ・五線上の音(ミソシレ)より、間の音(レファラド)の方が答えるまでに時間がかかったため、栗山小の「色付けした五線譜」の実践を参考に、第3線を赤く示した。それでも自力で読むことが難しい場合には、「ミとソの間だよ」などのヒントを出し合うことで答えることが

できた。一人で読めるようになるにはハンドサイン等さらなる支援が必要である。

- ・ 2音-Step 2の「聴き取りチャレンジ」では、もともと読譜が得意な児童も、新しいチャレンジに目を輝かせながら取り組むことができた。「ドレ」と「シド」を正しく聴き取り、自信をもって答える場面があったことから、「C」の音高を正しく聴き取る力が身に付いていることがわかる。理由としては、児童らが、これまでの学習や生活の中で触れてきた音楽から、「主音」の存在やその働きを感じ取ってきた結果なのではないかと考える。これらの聴き取る力は、検証に関わる場所ではないが、今後の学習で発揮されることに期待する。このように、多様な児童の実態を踏まえ、より高度な学びを求める児童の可能性を広げることも個別最適な学びの一つと言えるであろう。

## ②「ポルカ・ワルツ体操」

(活動内容)

○ 2拍子や3拍子の音楽に合わせて身体を動かす。

< 2拍子 > 「鍛冶屋のポルカ」(教出2年・鑑賞教材)

- ・ 身体をひねって手を合わせたり、前屈みになって背中を軽く叩いたりして、2拍子の拍を感じながら身体をほぐす。

< 3拍子 > 「エーデルワイス」(教出4年・表現教材)

- ・ 教師の真似をしながら、3拍子の拍の流れを感じられるような体操を行う。
- ・ 拍の流れや旋律の変化に合う動きを自分たちで考える。

(児童の様子)

- ・ 友だちと協働的に活動したことで、どの児童も無理なく楽しく参加することができ、音楽に合わせて身体を動かすことができた。
- ・ 2拍子に比べ、3拍子は拍をつかむことが難しい様子で、始めは音楽に合わないペアが多かった。
- ・ 3拍子のリズムフラッシュをした後は、強拍を意識して音楽に合わせられるようになった。
- ・ 曲の感じに合わせて、動きに強弱をつけるなど変化をさせるペアもいた。
- ・ 活動後は、身体を揺らしながらリコーダーを演奏する姿が見られた。

(考察)

- ・ 始めは身体を動かすことのおもしろさのみを楽しむ児童もいたが、互いに動きを観察したり、撮影した動画を見たりすることで、音楽と身体の動きの関わりに意識が向くようになり、しっかりと音楽の拍を聴いて合わせようとする児童が増えた。また、身体の動きを途中で変化させたペアに着目したことで、「途中で速くなる気がする」という児童の気づきを、その後の旋律の特徴の変化と表現の工夫の学習へとつなげることができた。このことから、身体を動かす活動は、拍の流れを感じ取ったり、抑揚を表現に生かしたりする上でも有効であったと考える。
- ・ 毎時間ペアの組み方を変えることで、始めは1曲通して同じ動きをしていた児童も、曲想の変化に合わせて動きの大きさを変えるなど、バリエーションを豊かに表現するようになっていった。様々な相手と音楽の感じを共有することで、自身が感じ取ったことを再確認すると共に、新たな気づきを促し、考えを広げるために有効であることがわかった。

### ③リズムフラッシュ

手立て②のワルツ体操で、自然と4拍子になってしまうペアが多かったことから、3拍子の拍感を身に付けるための別の手立てが必要であると考えた。そこで、旭小の実践を参考にリズムフラッシュを取り入れた。

#### (活動内容)

○足と手を使って、モニターに映った3拍子のリズムを正しく打つ。

- ・1拍目は必ず足踏みにし、強拍を感じられるようにする。
- ・リズムが変わる度に、「足手手」の基本リズムを挟む。
- ・「エーデルワイス」の旋律に使われる特徴的なリズムをカードに取り入れる。



#### (児童の様子)

- ・「8分音符はなんとなく速い感じ」という感覚でとらえていた児童も、既習事項をおさらいすることで、「4分音符の半分の長さ」であることを理解して正しく読めるようになった。
- ・足と手の両方を動かすことが難しい児童は、強拍の足だけに集中して取り組んだ。
- ・始めはリズムを探りながら、周りの真似するなどしてリズム打ちする児童もいたが、繰り返し行くと、それぞれがスムーズにできるようになり、足踏みや手拍子の音が揃っていった。

#### (考察)

- ・事前調査と比べて、事後調査のリコーダー視奏でリズムを正しく読んで演奏した児童が2倍に増えた。(資料8-5) このことから、楽譜を見ながらリズム打ちをする常時活動を取り入れたことで、2分音符・4分音符・8分音符を使った簡単な旋律について、楽譜から正しいリズムを読み取る能力が高まったと考える。
- ・カードを変える度に、「足手手」の基本リズムを挟んだことで、「強弱弱」の流れを保ちながら、リズムをはめ込んでいくことができた。繰り返し取り組む中で、児童が少しずつ修正をして、隣の友だちとぴったりリズムが一致した時には、一段とリズム打ちの勢いが増した。単純な作業の繰り返しでも、他者と協働して取り組むことで、様々な気付きやおもしろさ、楽しさを感じられることがわかった。
- ・「エーデルワイス」を演奏する際、以前は短くなってしまっていたフレーズの終わりを拍分ししっかり伸ばして演奏できる児童が増えた。また、旋律の表現の工夫を考える際に、多くの児童が「リズム」に着目することができた。授業の導入の場面において、楽曲に含まれる特徴的なリズムをフラッシュカードに取り入れるなど、活動のねらいを明確にして、主活動につながるような工夫をすることが重要であることがわかった。

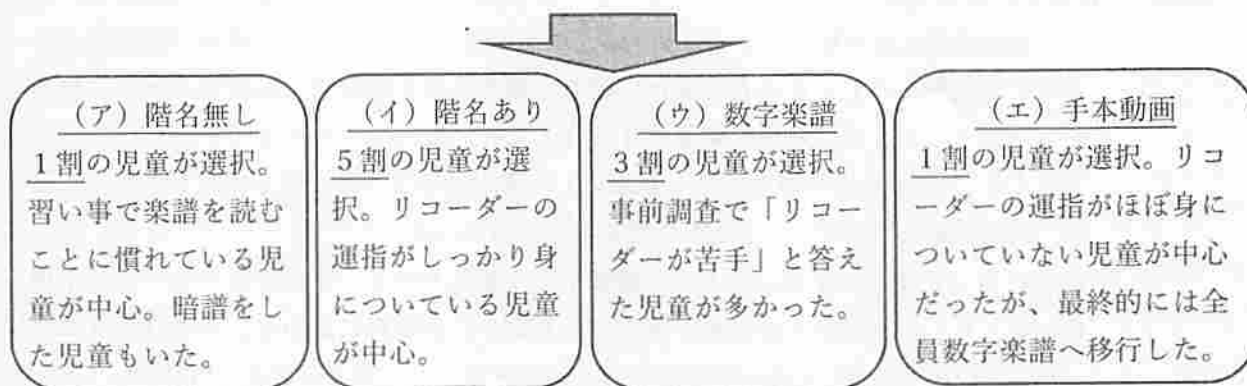
手立てⅡ 学習素材や表現の仕方について、児童が自分に合った学び方を選択できるような環境を整えることで、主体的に学習に取り組めるようにする。

### ④視覚的に分かりやすい学習素材の用意 (資料5)

「エーデルワイス」のリコーダー演奏の学習で、以下の4つの教材から学び方を選択する。

- (ア) 階名無しの楽譜…教科書の楽譜を使用する。
- (イ) 階名ありの楽譜…教師が作成した楽譜を使用する。(一部、読譜は児童による)
- (ウ) 数字楽譜…トーンホールの塞ぎ方を数字や絵で表した楽譜を使用する。
- (エ) 手本動画…ミライシード「オクリンク」にて撮影したものを使用する。  
(演奏速度が違うものや、曲を区切って演奏したもの)





<特別な支援を要する児童の学習素材の選択と変容>

A 児の場合	<p>おっとりマイペースな児童。</p> <p>「階名ありの楽譜」では、自主的に練習を進めることが難しかったため、「数字楽譜」を自分の楽譜に書き込んで練習に取り組んでいた。(資料6)上のパートが演奏できるようになった後、4人グループで聴き合いや学び合いを重ね、下のパートは数字を書かずに演奏できるようになった。旋律の特徴にふさわしい表現を考える学習では、曲想の変化に合わせて色を使い分けて記述する場面があった。</p>
B 児の場合	<p>外国籍の児童。日本語での指導が可能。</p> <p>「階名ありの楽譜」では、自主的に練習を進めることが難しかったため、「手本動画」を見ることを選択。何度も繰り返し再生して、運指を確認。その後、数字楽譜に移行。全部通して演奏することは難しかったが、「3段目だけは絶対やりたい。誰か楽譜を指で追ってくれと吹きやすい」との本人の意向により、一部分の旋律に集中して練習を繰り返したことで、自信をもって演奏できるようになり、達成感のある表情で授業を終えることができた。</p>
C 児の場合	<p>知的学級在籍児童。指先を早く動かすことが難しい。</p> <p>在籍する支援学級へ、事前に楽譜を渡して予習をしてもらった。数字楽譜を選択し、曲を前半と後半に分けて運指を身に付けてから交流学习に参加した。しかし、運指が合っていない隙間が空いてしまったり、息の強さをコントロールすることが難しかったりしたので、運指以外の課題に対する支援が必要。</p>
D 児の場合	<p>外国籍の児童。日本語での指示はほぼ通じない。リコーダーは今年度購入。</p> <p>英語が通じるため、階名をローマ字表記にしたり数字楽譜を英語で伝えたりしたが、演奏が難しかった。そこで、四和小学校が実践していた、リコーダースタンプからヒントを得て、運指のイラストを楽譜に貼ると、理解しやすい様子であった。(資料6)全体で合わせる時は進んで演奏することが難しかったため、演奏する音を絞って、特定の音だけ一緒に演奏をするようにした。以前よりリコーダーに興味をもち、よく触ったり色々な音を出して遊んだりするようになった。</p>
E 児の場合	<p>外国籍の児童。6月に編入し、日本語での指示が通じない。</p> <p>モンゴル語のみ読み聞きができるため、具体的な指示は翻訳をして行った。算用数字(1, 2, 3…)に対しては同じ概念をもっていることがわかったため、数字楽譜を選択。少しの説明で理解を示し、2回目の授業には「エーデルワイス」を通して演奏できるようになった。</p>

(考察)・自ら学び方を選択したことで、「リコーダーが得意ではない」と答えていた児童も、進んで表現活動に取り組もうとする意欲の高まりが見られた。また、「自分の練習法があることに気付いた」と述べた児童は、新しい楽曲に取り組む際、必要な部分だけ数字を書くなどして、自分専用の楽譜を作ろうとした。どのスタートラインに立っていたとしても、「これならできるかもしれない」と思わせるような支援を用意しておくことが、個別最適な学びにとって重要であることが分かった。

- ・「自分に合った学び方を選んだことで練習に取り組みやすく、以前よりリコーダーが得意になった」と9割以上の児童が答えたことから、本題材において、一人ひとりに合った学習環境(教材)をほぼ用意することができていたと考えられる。(資料8-1)
- ・いずれの方法でも習得が難しかった児童や、運指以外の課題を抱えた児童については、今後さらに個々のニーズを把握したり、特別支援学級の担任等、専門分野の教職員に協力を求めたりするなどして対応を考える必要がある。

### ⑤旋律の特徴に合った演奏表現について、意見を共有する場の設定

<第6時・第7時の展開から>

時	◎学習目標 ○学習活動 ・具体的な手立て	◇児童の様子・発言
第6時	<p>◎「エーデルワイス」の3段目の演奏の工夫を話し合い、音楽的な表現を高める。 (前略)</p> <p>○アとイの旋律の特徴をつかみ、リコーダーで演奏する。</p> <p>○ウの旋律の特徴を、他の旋律と比較することで理解する。 ・導入のワルツ体操で、ウの旋律から動きを変えたペアに着目し、なぜ変化させたのかを問い、全体で共有する。</p>	<p>◇音楽に合わせて身体を揺らしながら、抑揚をつけて演奏している。</p> <p>・「なめらか」「3拍子でゆったり」「静か」「草原に咲いている花」「優しい」</p> <p>・「途中から動きが激しくなったのは、ウから強くなるような感じがしたから」</p> <p>・「音の高低差が激しくなったから」</p> <p>・「旋律の前半と後半でも感じが違う」</p>
第7時	<p>○3段目をどのように演奏するかについてグループで話し合い、思いや意図が表現に生かされるように演奏する。</p> <p>・これまでの学習をもとに、ウの旋律をどのような感じで表現したいか考え、オクリンクで提出する。</p> <p>・同じ思いをもつ者同士でグループを組み、どのように演奏すれば思いを表現に生かせるか話し合う。</p> <p>・実際に演奏して聴き合い、自分たちの思いを生かした表現になるように手直しをする。</p>	<p>(ウの旋律の特徴)</p> <p>・「始めが高い音から始まる」</p> <p>・「リズムが細くなる」</p> <p>・「後半はアイエの旋律と似ている感じ」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>【思い】このように表現したい</p> <p>・はずむ ・明るい ・楽しい</p> <p>・さわやか ・前半は元気で後半優しく</p> </div> <p>(演奏の工夫について【意図】)(資料7)</p> <p>・「最初のレの音を少し強く吹こう」</p> <p>・「舌で音を止めると、弾む感じが出る」</p> <p>・「他の旋律と雰囲気が変わらないように、やり過ぎに注意しよう」</p>

<p>・グループごとに演奏を発表し、互いの表現のよさについて全体で意見交換する。</p>	<p>(他グループの演奏を聴いて)          ・「他のグループでやっている工夫を自分たちの演奏にも生かしてみよう」</p>
--	---

(考察)

- ・旋律の特徴をつかむ場面において、階名や音高、リズムなど、楽譜を見てわかることから考えを深めようとする意見が多かったことから、常時活動での学びが楽譜に対する抵抗感を減少させ、思考の手がかりとして楽譜を活用できるようになっていたと考える。(資料7)
- ・表現の仕方を選択し、同じ思いをもつ児童同士でグループを組んだことで、同じ思いの実現のために共に思考を働かせ、演奏を聴き合って確認するなど共感し合う姿が多く見られた。音や言葉を通して対話し、思いを表現に生かすための様々な工夫を試したことで、自分たちなりの音楽表現を見つけることができたと考え。
- ・事後調査では、85%の児童が「自分たちの思いを表現できた」と解答した。その一方で、「表現できたかわからない」と解答した児童も数名いたことから、学習の前と後の演奏を記録して見返すなど、学びの成果を実感できるような手立てを取り入れたい。(資料8-3)
- ・「グループで練習する方がやりやすかった」との意見があったことから、学び方の選択肢の幅を広げていくことも視野に入れていく必要があるだろう。

## 6 総合考察

最後に、二つの手立てについてまとめておく。手立てⅠについては、多様な児童の実態を踏まえた学習環境を用意したことによって、どの児童も無理なく進んで学習に参加することができた。また、読んだり聴いたりしたことを言葉や身体の動きで表現し、それらの表現を通して他者と交流し共感を得ることで一人ひとりの表現の幅が広がっていった。加えて、段階的・継続的な常時活動を通して小さな成功体験を積み重ねる中でも、他者との関わりが、さらにその効果を高めるということがわかった。手立てⅡについては、一つの教材に対して複数の学習素材を用意したり、目標ごとにグループ分けをしたりして、児童が自らに合った学び方を選択できるような環境を整備し、段階的に学習を進められるようにした。そうすることによって、児童が主体的に学習に取り組み、演奏し表現できることの達成感や喜びを感じることができたと考え。

常時活動での学びの積み重ねや、自らに合った学び方を選択する個別最適な学びを通して、児童が演奏に自信をもち、身に付けた知識や技能を自分の思いや意図を表現するために活用しようとする姿が見られたことから、これらの実践は、音楽表現を高めるための資質・能力を育成する授業づくりとして有効な手立てであったと言える。

## 7 成果と課題

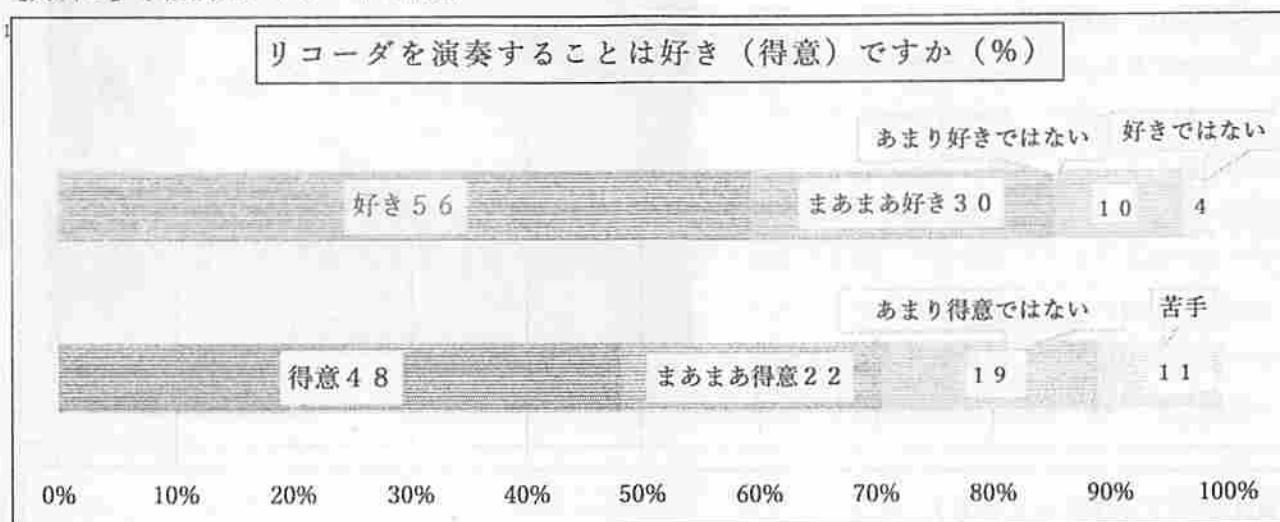
- 多様化する児童一人ひとりに対応する学習環境を整備し、自らに合った学び方を選択できるようにしたことで、主体的に学習に取り組み、音楽表現を高めるための資質・能力を伸張することができた。
- 児童の実態は、さらに多様化していくことが予想される。本研究において、成果を実感できていない児童もあり、すべての児童にとって十分な支援ができていたとは言えない。どのような児童に対しても、個別最適な学びとなるような授業づくりについてさらに検証していく必要がある。

# 資料編

### 重視する施策の分野：教職員



### 【資料2】事前調査アンケートの結果



### 【資料3】四街道市内小中学校による「個に応じた授業実践」

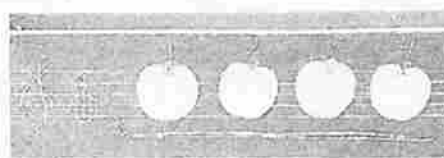
#### ①常時活動の工夫

#### 旭小学校 「言葉でリズム」

1年…いろいろな言葉をリズム打ち  
 2年…自分で考えた言葉でまねっこリレー  
 中学年…言葉と結びつけてリズム譜を読む  
 高学年…言葉のリズムアンサンブルをたのしむ  
 ◎言葉を使うとリズムを読んだり覚えたり知ることができる子が増え、合奏で自分の覚えやすい言葉でリズムを刻んでいる。

#### 吉岡小学校「かごとリンゴ」

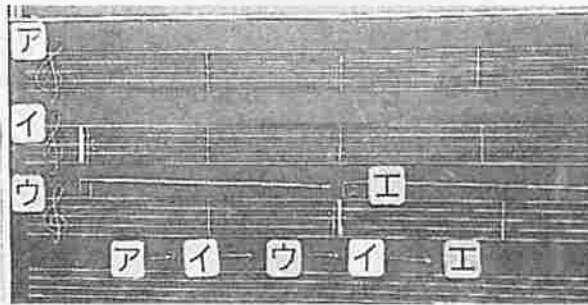
1小節をかごとに見立て、4分音符をリンゴ1個分として拍子の仕組みを説明する。4分の4拍子の場合、「1つの籠にリンゴが4個入るよ」  
 ◎音符で数えるよりも、身近な物に置き換えることで、拍子の数え方を理解しやすくなる。



②視覚的に分かりやすい素材の提示

吉岡小学校 「アイウ色統一」

くり返しのある楽曲の演奏順をわかりやすくするために、楽譜に色を付ける。色は教科書で使っているものに統一し、全曲共通で使用する。



四街道西中 「色付き楽譜」

特別配慮を要する学級での音楽の授業にて、楽譜をミュージックベルのベルの色と一致するように色分けする。



みそら小 「和音色シール」

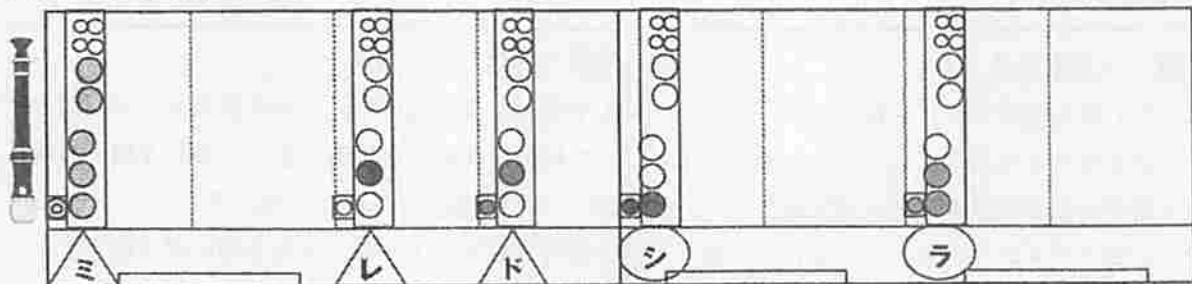
和音の色をIは赤、IVは緑、Vは青、V7は黄色と色を決め、教科書の和音のパートと、鍵盤ハーモニカで指をおくところに色別のシールを貼った。演奏する際に、教科書の色を見て同じ色を鍵盤ハーモニカで演奏するようにした。

◎普段、鍵盤ハーモニカが得意でない児童も色を見てすぐ演奏することができた。演奏することを短時間で進めることができたので、グループでリズムを工夫した。和音のリズムの変化によって曲の雰囲気が変わっていくことを味わうことができた。



和良比小 「フィギュアノート」

様々な理由によって楽譜が読みづらい児童生徒のため、音の高さや長さを色と形に置き換えた教材。鍵盤楽器やリコーダー演奏において、新曲に取り組む際に使用した。符頭の形や色、配置などに決まりがあり、使用する色や配色は見分けやすいように配慮されている。



(フィギュアノート 第5学年 器楽教材「小さな約束」より)

<色>ドレミファソラシ ⇒ 赤茶灰青黒黄緑 (原色や無彩色を中心に使用)

<配色>トニック⇒赤、ドミナント⇒黒、サブドミナント⇒青 (重要な音がすぐに見つけられる)

※指導に使用するためには、ベーシックインストラクター研修を受ける必要あり。

### 四和小学校「リコーダースタンプ」

楽譜にスタンプを押し、指をふさぐ所を黒く塗る。運指を一目でわかるようにした。

教科書、教科書に階名、リコーダースタンプ、リコーダースタンプと階名、の中から自分で使用する素材を選択できるようにした。

◎高学年の児童に好評であった。特に下位の児童や日本語のわかりづらい外国籍児童、交流の特別支援学級の児童に役立ち、楽しくリコーダー練習に取り組むことができた。5年のある児童は、昨年度までリコーダーへの苦手意識が強く、範奏や範奏動画、友達の指の動きを見ながら等では流れについてこれず、自分で練習することもできずに困っていたが、今回スタンプ付きの楽譜を配ると、早速試し始め、自分で練習を進めることができた。慣れると楽しかったのか、次の音楽の授業を楽しみにするようになり、周りの友達に褒められ認められてからは自信もつき、音楽科の他の活動にも一生懸命に取り組むようになった。リズムの理解には別の支援が必要であるが、演奏することの楽しさを感じるようになってきたのは大きい。



### 四街道小学校 「ドレミ色指輪」

鍵盤ハーモニカの運指と階名が結びついていない児童のために、①楽譜の音符の色分け、②鍵盤ハーモニカへの色丸シールの貼付、③指への色輪ゴムをはめることを行った。色分けは「ドレミの歌」に倣い、ド：ドーナツ（茶）、レ：レモン（黄）、ミ：（緑）、ファ：ファイト（赤）、ソ：空（青）…とした。この色分けは、5年の和音の学習（Ⅰ：茶、Ⅳ：赤、Ⅴ：青）や校内の鍵盤系の楽器の貼付等に共通させた。



◎実態として、就学前の鍵盤ハーモニカの演奏経験の差が大きかったため、演奏経験の少ない児童にとって、①楽譜、②鍵盤ハーモニカ、③指、が一致することは、大変有効な手立てだった。

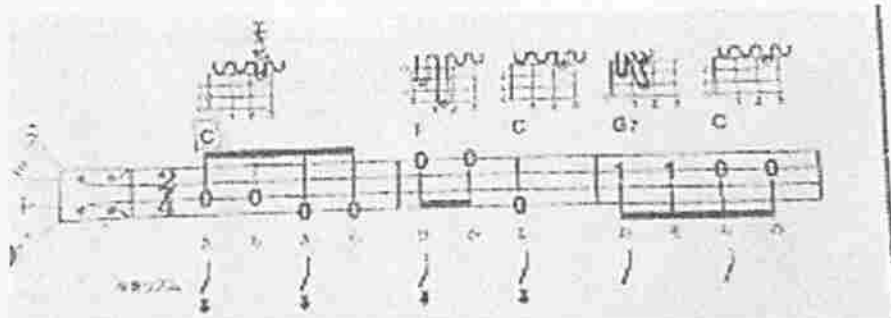
### 四街道中学校 「TAB譜」

「ウクレレ」を表現分野「器楽」で扱うことが、少ない時数で幅広い学習を進めるために有効な手立て。 ※コロナ前は篠笛を採用。コロナ禍で弦楽器「ウクレレ」に切り替え。

⇒民族楽器のため、五線譜が読めなくても演奏を楽しめるように記譜されている。(例 篠笛「数字譜」「運指表」ウクレレ「TAB譜」)

◎取り組みはじめの初歩段階では、耳なじみのある曲を採用し「TAB譜」「指図」を提示して練習を行った。⇒はじめは「きらきら星」でメロディと簡単なコードの学習から取りかかった。その後は生徒のレベルに合わせて複数の楽曲から選択させて練習に取り組んだ。

◎容易に音が出せるため、歌唱表現の不得意な生徒も意欲的に楽しみながら練習に取り組むことができた。メロディとコードを組み合わせて学習することにより、声を掛け合っテアンサンブルを楽しんだり、弾き語りをしたりする姿が見られた。 ※今後は3学年での「アラソフェス協奏曲」の鑑賞から、ギターへの学習に発展させて行く予定。



### ③ICTの活用

#### 四街道北中学校 「演奏動画の撮影」

歌唱や器楽の表現において、生徒が自身の演奏を見返したり修正したりして、思いや意図を表現に生かして演奏できているか客観的に評価できるようにした。

◎気をつけるべきことをより考えて表現できるようになった。限られた時数の中で、一人一人が時間を有効に活用して学習することができる。



#### 【資料4】





【資料5】実践Ⅱ-④視覚的に分かりやすい学習素材より

(ウ) 数字譜

**エーデルワイス**

【資料6】実践Ⅱ-④特別な支援を要する児童の学習素材の選択と変容より

< A児が選択した学習素材と活用の記録 >

はくの流れやせんりつを感じを生かして えんそうしよう

4年 ( )

**エーデルワイス**

作曲 田代文子  
作詞 田代文子

階名楽譜に自分で数字を書き込んだ。②のパートを演奏する際は、数字を必要としなかった。

< D児が選択した学習素材 >

階名をローマ字表記にしたり、数字譜を使用したりしたが、「イラストが分かりやすい」と、こちらを選択した。

【資料7】実践Ⅱ-⑤旋律の特徴にあった演奏表現について、意見を共有する場の設定より

<話し合いの記録>

落ち着く感じ

速さを減らす  
なるべくつなげる  
息の強さを弱くね(やと)る

どよよな感じ

はずんだ感じ

①なぜそのような感じにしたいか、ポイントになるのころにする、やってみよう。

②演奏の工夫 - どのように演奏すれば○の感じを表現できるか話し合い、やってみよう。  
上パートと下パートのタイミング、上のドと上のミを合わせる!!  
上のドは、かりあげる。

♪♪♪  
△

2. 演奏の上、このように演奏すれば、〇感じを表現できるか話し合い、やってみたい。

音楽(2015)

94833

1. 楽譜の2.の楽譜に注目し、Rで示されるリズムをとりながら演奏しよう。

2015

△

1. 楽譜の上、このように演奏すれば、〇感じを表現できるか話し合い、やってみたい。

音楽(2015)

14947

2. 楽譜の上、このように演奏すれば、〇感じを表現できるか話し合い、やってみたい。

音楽(2015)

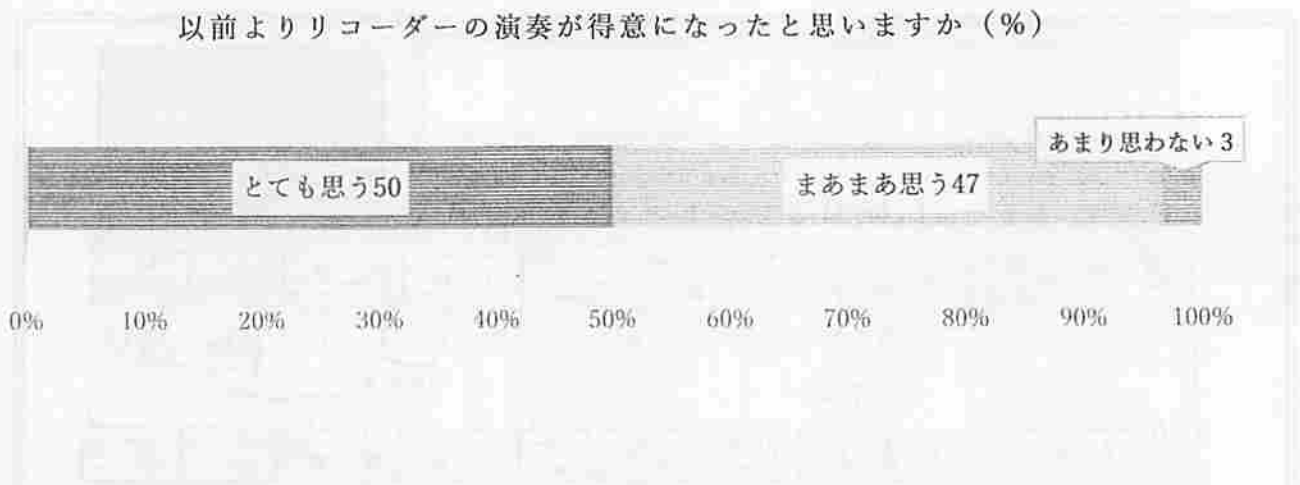
14947

1. 楽譜の2.の楽譜に注目し、Rで示されるリズムをとりながら演奏しよう。

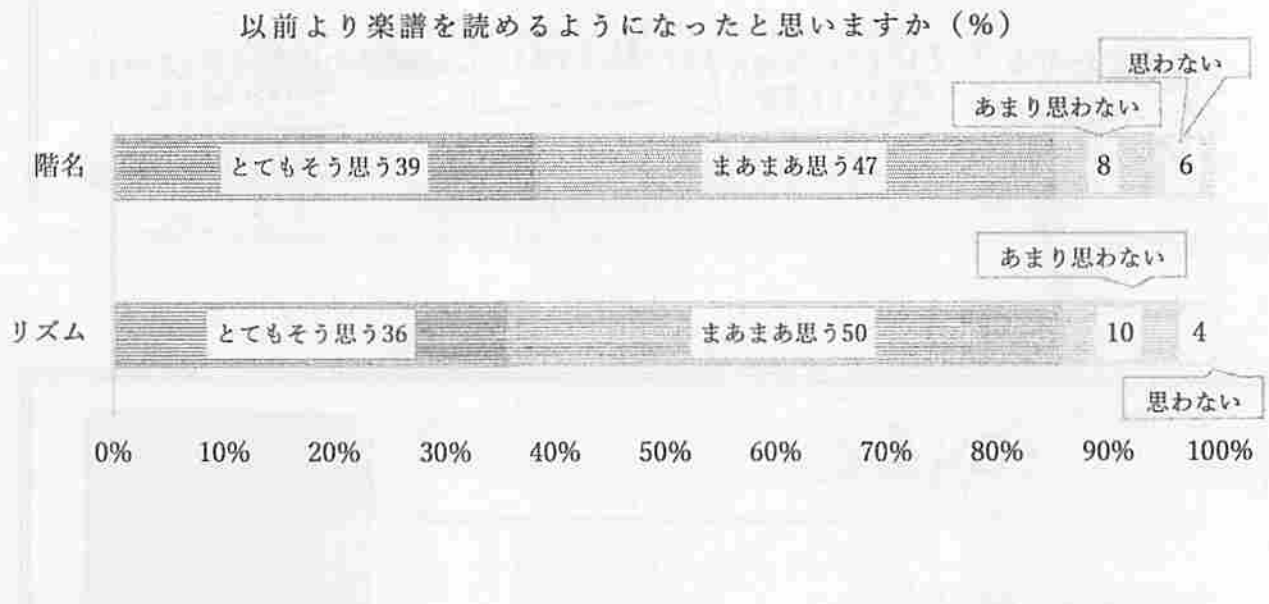
2015

【資料8】 事後調査の結果

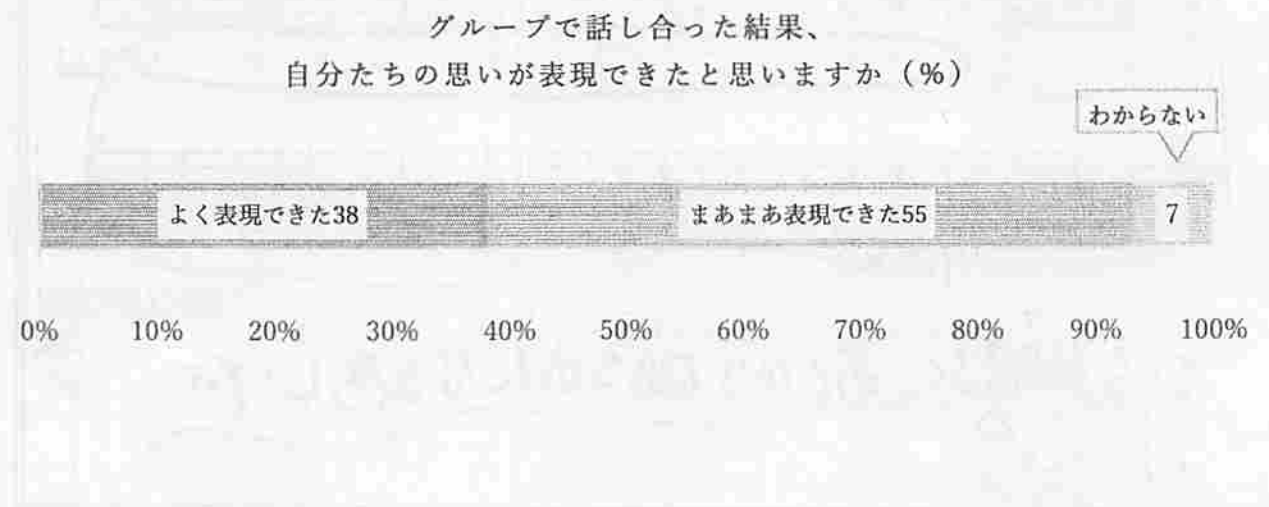
(8-1)



(8-2)



(8-3)



(8-4) 階名、リコーダー運指の理解 (令和6年6月調査 4クラス平均値)

次の音の階名を教えてください。	次の音をリコーダーで演奏する時に、指でおさえる穴を黒くぬりましょう。
	
正答数 【4問】 20人 (約70%) 【3問】 5人 (約16%) 【2問】 2人 (約6%) 【1問】 1人 (約2%) 【0問】 2人 (約6%)	正答数 【3問】 24人 (約83%) 【2問】 3人 (約10%) 【1問】 0.5人 (約2%) 【0問】 1.5人 (約5%)

(8-5)

次のせんりつをリコーダーで演奏しましょう。



教育出版 音楽のおくりもの4年  
「こきょうの春」より

【結果】(4年2組 30名の場合)

事前調査	階名なし	階名あり	数字楽譜	模範演奏を見て	計(人)
正答	2	3	1	1	7 ●
リズムに誤り	3	13	7	0	23
計(人)	5 ●	16	8 ●	1	31

事後調査	階名なし	階名あり	数字楽譜	模範演奏を見て	計(人)
正答	4	8	2	0	14 ▼
リズムに誤り	9	7	0	0	16
計(人)	13 ▼	15 ▼	2 ▼	0	30

- ①階名の表記なし五線譜をその場で読んで演奏できる児童が2倍以上に増えた。
- ②事前では数字楽譜を選択していた児童が、事後では階名表記の楽譜を選択するようになった。
- ③音名や運指、リズムを含めて、正しく視奏できた児童が2倍に増えた。

【資料9】児童の授業の振り返りから

6/12	なめらかな感じを出すために、タンギングを減らしたり、さいごにかしアレンジをしたり、いろいろなくふうができた。 ①②パートしかないから、③パートをつくってみたい。
6/24	今日のじゅ業では、自分たちの工夫ができることがわかりました。なめらかにするために、タンギングを減らしました。次は、逆に多くしたいです。タンギングを多くすると、弾む感じがいいと思います。

- ・「なめらかな感じを出すために、タンギングを減らしたり、最後に少しアレンジをしたり、色々な工夫ができた。①②パートしかないから、③パートもつくってみたい」
- ・「今日の授業では、自分たちの工夫ができることがわかりました。なめらかにするために、タンギングを減らしました。次は、逆に多くしたいです。タンギングを多くすると、弾む感じがいいと思います。」

6/14	落ち着いた感じを伝えるために、速さを変え、音をなるべくつなげて息の強さを弱くしました。落ち着いた感じに演奏できたと思います。
------	--

- ・落ち着いた感じを伝えるために、速さを変え、音をなるべくつなげて息の強さを弱くしました。落ち着いた感じに演奏できたと思います。

6/18	ぜんたいでキにとびはねるようにえんそうできました。 少し体をゆらしながらテンポをとれました。
6/21	みんなでぶいたさいごのまよりのえんそうがとてはあんなていて、くいがいいようなえんそうができました。

- ・全体的に飛び跳ねるように演奏できました。少し体を揺らしながらテンポをとれました。
- ・みんなで吹いた最後のまよりの演奏がとて弾んでいて、悔いが無いような演奏ができました。

<引用文献>

文部科学省（平成29年3月）『小学校指導要領解説（総則編）』東洋館出版社

文部科学省（平成29年3月）『小学校指導要領解説（音楽編）』東洋館出版社

奈須正裕（2022）個別最適な学びとは何か。桂聖編『授業のユニバーサルデザイン vol.13』東洋館出版社 pp8-9

<参考文献>

中央教育審議会答申（令和3年1月）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』文部科学省

四街道市の教育（令和6年3月）『第2期四街道市教育振興基本計画』四街道市教育委員会

一般社団法人フィギュアノート普及会 HappyMuse <https://happymuse.net/>